



六 夢の先は

「こっちに扉があったよ」

健太は慌てず、行き止まりの壁の横の非常口を押した。

「明るい」

「まぶしい」

そこは塔の屋上だった。だけど、屋上の周りはフェンスで取り囲まれている。

「折角ここまで来たのに」

「もう逃げる場所がないわ」

洋介と優子ちゃんが呆然と立ちつくす。フェンスの下に公園が見える。むにゃむにゃや他の夢たちが蟻のように小さく動めいている。こんなに高くまで登ったのだ。塔はこんなにも高くなっていったのだ。だけど、感心している暇はない。これでは上にも下にも進めない。後の扉が開く音がした。サラリーマンたちが健太たちを捕まえて出世しよう和我先に転がるようにして屋上に飛び出してきた。このままでは捕まってしまう。この塔の一部になってしまう。

「あそこへ行こう」

健太が指を差した先には、白い研究服を着た博士がいた。その側にはロケットの発射台があり、スタッフたちが忙しそうに走り回っている。

「君たちは誰だ」

スタッフたちに忙しそうに指示していた博士が振り向いた。

「僕たちはこの夢の塔の創造者です」

健太が自信を持って答える。

「そうか。君たちがこの塔を作ったのか。素晴らしい発明品だ。ノーベル賞ものだよ」

「いえ。僕だけじゃないんです。僕たち、こどもたちが創った夢の塔なんです」

「どちらにしろ、夢をかなえることは素晴らしいことじゃ」

「あなたもこのロケットを作ったんでしょう」

三人は博士の横に並び、ロケットを見上げる。

「そうだ。もうすぐ、このロケットを発射させるんじゃ。今、そのパイロット探しているところだ。ちょうどよかった。君たち、このロケットを操縦しないか」

博士が三人に向かって微笑んだ。

「あの博士、健太とそっくりじゃないか」

「健太君の夢は、宇宙ロケットを作る博士になることなんだね」

洋介と優子ちゃんが顔を見合わせる。

「はあ、はあ、はあ。疲れた。だが、よくやったぞ博士。夢の大賞ものだ。さあ、そいつらをこっちに引き渡せ」

むにゃむにゃのリーダーが荒い息のまま肩を上下させて立ち尽くしている。後ろにはサラリーマンたちが「俺が社長になるんだ」「いや、俺が重役だ」と互いに牽制し合いながら、今にも飛び掛からんばかりの態勢で身構えている。

「断る。折角、パイロットが見つかったんじゃ。わしの夢をつぶすきか」

博士はむにゃむにゃのリーダーの顔に水鉄砲をかけるかのように言い放った。

「何を言うか。この夢の塔のリーダーは俺だぞ。俺が、お前たち夢を集めてきたんだぞ。お前はあの俺の言うことが聞けないのか」

リーダーは今にも頬を突き抜け、耳の下まで裂けんばかりの大きな口で叫んだ。

「夢を集めて来たのはお前かもしれないが、この夢の塔の創造者はここにいる子どもたちだ。創

造者を捕まえるわけにはいかない。それに、わしは科学者だ。科学者は自分の信念で研究をする。だから、いかなる権力にも屈しないんだ」

博士は自分の左胸に強く握り拳を当てた。

「ううううう・・・」

何も言い返せないリーダー。だが、体は怒りで朱に染まり、全身の筋肉が震えている。その震えは、屋上の床を通じて、健太たちをはじめ、屋上にいる全ての夢たちに伝わった。

「じゃあ、博士。僕たちがパイロットとして乗り込みます。いくぞ」

健太は発射台の階段を駆け登って行く。-そして、ロケットの操縦席に乗り込んだ。

「おい。健太、待ってくれよ」

「あたしも乗るわ」

洋介と優子ちゃんも健太の後に続く。

「おい、博士。今すぐ、ロケットの発射を止めるんだ」

リーダーが博士の前に立ちふさがった。

「もう、発射を止めるのは無理じゃ。秒読み段階じゃ」

博士は平然と答える。サラリーマン、アイドル、白衣の天使、野球サッカー選手、警察消防士、タコイカ、ライオントラ、むにゃむにゃのリーダーなどがロケットの周りを取り囲んだ。

「博士、もう一度言う。ロケットの発射を止めるんだ」

リーダーが博士の両肩を掴み、揺さぶる。

「夢に向かって突き進む者は、誰にも止められないんじゃ」

博士は満足そうにロケットを見上げる。

「じゃあ、俺が止めてやる」

「何をするんじゃ」

「どけ」

リーダーは博士やスタッフたちを突き飛ばすと、ロケットの発射装置に近づいた。

「こんなもん、壊してやる」

リーダーは近くにあった椅子を振り上げた。

「こら、やめろ。わしの、研究の成果を、夢をつぶすつもりか。夢がつぶれたら、この塔も壊れるぞ」

博士がリーダーの背中に飛び掛かった。

「うるさい。どけ。夢なんか、ロケットの他にもいくらでもあるんだ」

リーダーが今、まさに発射装置を壊そうとした瞬間、轟音を立ててロケットが屋上から離れ始めた。

「うわ」

リーダーやサラリーマンたちが噴射の風の勢いで吹き飛ばされた。と同時に、夢の塔が大きく傾き始めた。

「どうなっているんだ」

床に這いつくばったまま動けないリーダー。

「助けてくれ」「きゃあ」と叫びながら屋上を転がるサラリーマンやアイドルたち。

「みんなが屋上に集まったので、重くなりすぎて、塔のバランスが崩れたんじゃ」

床に転がりながらも、あくまでも冷静な博士。

「お前たち、急いで下に降りろ」

リーダーは床に這ったまま命令するが、塔が傾き始めたのでサラリーマンたちは自分の思うように動くことはできない。ただ床にしがみつくのが精いっぱいだ。

「わー」「きゃー」「ブオオン」「ガオー」とサラリーマンやアイドル、動物たちは様々な悲鳴を上げ、夢の塔の屋上から地上へと落ちていく。その様子を上空のロケットから眺める健太たち。

「あっ。夢の塔が崩れていく」

「地面に落ちた警察官や野球選手たちが街の方に飛んでいくわ」

「きっと夢の創造者の子どもたちの所に戻って行くんだよ」

「アイドルの夢も」

「サラリーマンの夢も」

「宇宙ロケットを作る博士の夢は？」

洋介と優子ちゃんがロケットを操縦している健太の横顔を見つめる。

「今、こうして夢をかなえているよ」

健太は満足そうな顔で操縦かんを握っていた。公園に聳えていた夢の塔は跡かたもなく消え去った。そして、むにやむにやたちもいなくなった。